古希に非ず新希なり

「人生五十年」と言われた時代、七十歳まで生きる人はまれであった。だから数えで七十を古希と言う。

私も古希を迎えた。しかし今は日本人の平均寿命は八十三歳の高齢化時代を迎え、古希という言葉はあまりに現実と違う。

勝手に七十は古希に非ず、新希なりと名付ける。新しい希望へのスタート、労働から解放され、人生で最も充実した時にしなければならないと思う。

とは言え、老いて、死に近づいているのは事実で、この年齢になるとなぜか昔のことを懐かしむ気持ちが強くなるようだ。例えば自分はどんな所で生まれたのだろうかと…。

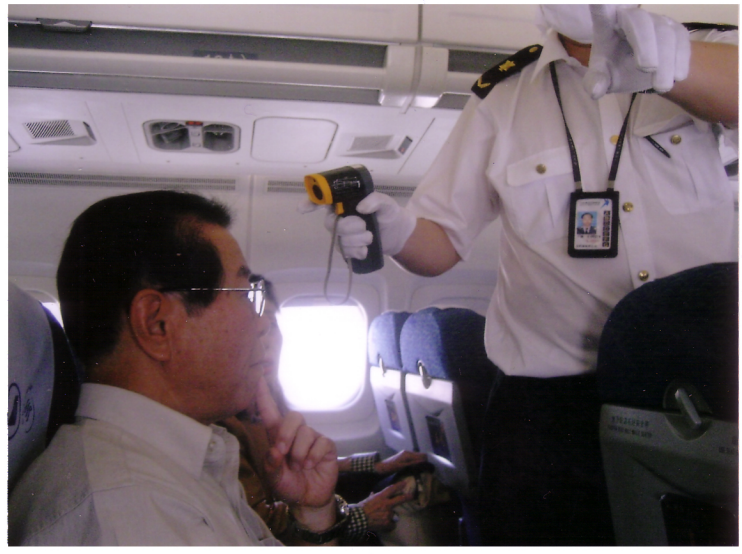
今の安定した時代は生まれた所も育った所も同じという人が多いが、戦前に生まれた人は育った所と違うという人がかなりいる。私もその一人だ。

昭和十五年、旧満州・奉天で生まれた。敗戦後の昭和二十一年に引き揚げたが、満州時代の記憶はほとんどない。それでも旧満州を一度は訪れたいという気持ちがあった。

そんな時、トルコを旅した時に親しくなった山口市の方から「瀋陽（旧奉天）、大連、旅順への格安ツアーがあるから行きませんか」と声がかかった。

二つ返事で参加を決めたが問題が起きた。新型インフルエンザの流行である。もしもの場合は周囲の人に大変な迷惑をかけることになる。

旅行社は予定通り実施するという。迷っていると神戸で海外旅行に関係ない人が新型インフルエンザに。


機内で検疫官が体温チェック

こうなると海外も国内も関係ない。娘が買ってくれた大量のマスクをかばんに入れて旧満州に旅した。

連載中のフィリピンの旅のあと旧満州への巡礼記を書くつもりだが、新型インフルエンザに関しては今がタイムリーだし、簡単に触れておきたい。

福岡空港に集合すると、旅行社から体温が三十七・五度以上の人は中国に入国できないから機内のアルコールは控え目にと注意された。

飲み物のサービスが始まったが、控え目どころではない。アルコール類は一切なし。その上、瀋陽に飛行機が着くと、検疫官二人が機内に入り、ピストルのような機械で、額に光線を当てて体温チェック。

新型インフルエンザに対して、中国も極めて慎重な対応である。

ところが帰りの飛行機では缶ビールがあった。飛行機は往復とも中国南方航空。なぜ行きと帰りの対応が違うのかわからない。

まさか日本のことは関係なしでもあるまいが…。

幸い、新希をはじめ高齢者は新型インフルエンザに対し、免疫があるらしい。年輪の重さを感じる。

神に似た者として造られた人間が、少しでも神に近づくことに希望を持つ時、高齢になっても輝いて生きられるのではあるまいか。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

大連港の第二ふ頭―戦後、ここから日本人がたくさん引き揚げた